
約

ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約

【Nコード】

N8886J

【作者名】

ゆり

【あらすじ】

・
・
―― 人間が神様と不思議な事をまだ信じていた頃のお話です。
・
一人の娘が世界を変えた物語は語り継がれていくことでしょうか。
その、真実がちっぽけで大きな事だったとは知られず。

結婚の宴（前書き）

美貌の貴族と平凡な娘は御伽噺より不思議なことを、時には起こすのです。

それを人々は「奇跡」と呼びました。

結婚の宴

昔、

世界の果ては、人の一生をかけて歩く距離に確かに存在していました。

空には星と月、神様達の乗る一艘の船が行き

人は運がよければ一生に一度、その船を見上げる幸運にめぐり会えました。

そんな、人々が神と不思議の存在を知っていた頃のお話です。

結婚の宴

町で一番良心的な宿屋と聞かれたら、まずこの「モゾのサンダル」か、貴族地区に程近い「カンザス神の息吹」の名前が出てくるはずですよ。

庶民の宿「モゾのサンダル」の女将は、親切で情に厚いことはこの地区では有名です。

ただ、噂好きなのはどうかならないものかと思うのですが。

今日も、新しく商隊を組むまでの滞在先にこの宿を選んだ男が

一階の食堂居酒屋で、注文した「今日の気まぐれメニューの具詰め煮」を

運んできた女将に捉まっっている様です。

「なんだいアンタ、シュリス様のお顔をみたこと無いのけ？そらあ人生半分は損してるね！！」

あの方の御顔は、神様の最高傑作！そりやもうお生まれになったときは、祝福の鐘がありがたくも御船から響いたって話さ。」

「へええ。そらたまげるような美貌なんだってのは噂には聞いたが、拝めるなんてさすがお膝元だね。」

俺も、旅に戻る前に一度は見てみたいもんだよ」

「運がいいぜアンタ」

隣で盛り上がっていた一団の男が、女将さんの脇から割り込んできて旅人のいるテーブルを叩きます。

「あと三日もすれば、かの有名なシュリス候のご結婚式が大聖堂で行われるから

その時じっくり拝めるぜ。

まあ、今から最前列は徹夜組みがいるから無理でも、物見やぐらの列ぐらいなら何とか

なるんじゃないかな。」

そういえば街に入った時から、尋常じゃない人の波をみて祭り事のように時期に着たのかと思っただけです。

「ちよいと！ちよろちよると人の話に鼻をつっこんで回るんじゃないよっ

床に酒をこぼすし！誰が掃除するんだいっ。」

言いたかったことを先に言われ、虫の居所が悪くなった

女将さんに、元のテーブルに戻るよう追い立てられた酔っ払いは、また騒ぎながら別のテーブルに

入り込みます。

「まったく。そうだあんた、まだ次の出発決まってるだろ？せつかくだから、シュリス様の晴れ姿を

見てからいきなよ！見なきゃ損だよ！」

「・・・そうだなあ、話の種に見ていくかな」

話は決まったとばかりに、女将さんに強い酒の注文をススメられて断りながら旅人は疑問に思いました。

（結婚式って事は相手がいるわけだが、話題に出ないとはねえ。世の花嫁とは主役と決まってる

もんだが、哀れだねえ）

旅人の気持ちは最もな意見でしたが、断りきれなかったお酒を飲むうちに意識の底に消えていきました。

結婚の宴（後書き）

はじめまして、初めて小説を書きます。読んでもらえればいいな・
・
と思い、書き続けたいです。

花嫁の事

ギュムルは仕方が無いと思っていた。

だって彼を、目の前にして倒れたり呼吸困難を起こしたりしないのは年頃の娘で、私だけなのだから。

たまたま、屋敷が近くて幼い頃に面識があつたために免疫が多少なりともあつた。

もちろん平気ではない。

彼の美貌を目の前にして顔が赤くなるのは、もう癖だと四五回あつた婚約中のデートで

言い聞かせ、なんとか会話をする事にまでは成功しだした。

次は手をつないでみるのだと、少しプランを立てたが

結局結婚式の日取りのほうが多く早く来てしまった。

明日、彼女は花嫁となるのだ。

政略結婚は貴族として覚悟の上だ。

しかし、自分の地位や才能、持っているものが欲しがられての結婚ではなく。

仕方が無く、条件が合うものが自分しかいなかったからとなると・

最初は、貴族の家に生まれた自分の中で、なんと無しに育っていた覚悟がぼつきりと折られた

感じがして、どうしてもぼんやりと考える事が多くなっていた。

たまには日の光でも浴びなさいと
父が自慢の中庭で剪定中に、私を呼び寄せた時の事だ

「結婚のことだが、お前はとうしたい。お前が納得しないならいいんだよ」

と私の答えを聞いてくれた。

相手は公爵様で断ることなどできないのに。

心配をかけてしまったと思った。

父は気が弱く、決して上に逆らわない人なのに、こんな事を考えさせてしまっていたなんて。

自分の存在を否定され、政略結婚ともいえないことになってしまい自分の中で鬱々としていたのが嫌になった。

政略結婚に自分の価値が見出せないのがどうした。

仕方ないじゃないか。

結婚を受け入れよう。

私には心配してくれて

選択肢を与えてくれた両親がいる

その言葉が彼女の支えとなった。

花婿の式

花は今日の日を待って咲き、空は雲さえも遠慮し
風も冬が近づくとというのに、春の匂いがしました。

大聖堂の大門の前には、幾重にも人々が立ち並んでいます
お酒を片手に乾杯を繰り返す人は、乾杯の音頭で、口に入る量がど
んどん減っていき

誰かまわすお祝いの言葉をかける人は、同じ人に三度も挨拶をして
いることに気付きません。

ここには農夫も役人も、娼婦も物乞いも
数限りない人が集まっています。

皆は、てんで勝手に騒いでいますが、大門が開く瞬間を待ち侘びて、
ちらちらと気にする姿は

一緒のようです。

結婚の道化

「門が開いたぞ！」

どこからか声が、出ました。

わぁ！！！！！

人々の声が大きなひとつの塊のように、一斉に歓声を上げました。
・・・しかし開く気配がなく、誰かの早とちりだった様です
長時間待ち続けている人々の緊張は最高潮になっていく所に
歓声が間違いだっとなれば、すわ暴動かと一触即発の空気がざわ
めき始めました。

地響きがおきたのかと錯覚する音に、鐘の音だ！と気付いたも
のはどれくらいいたでしょうか

ーおおおん

と長い響きの後
たくさん鐘の音のつながりが響き渡り、段々とひとつずつ消えて
いくことにあたりも静かにな
って行きました。

厳かに開かれる大門の扉から、ゆったりとした動きで
灰色の、銀と見紛うばかりの布地に、サジテ特産の赤珊瑚水晶を縫
い付けた衣装
コズン公爵家に受け継がれる黄金に群青の配色が美しい宝剣を携え
たシユリス卿が
花嫁を伴って現れました。

息を呑む美しさに、呼吸を忘れるものが倒れ
神に祈るものも現れました。彼の方が見えない所にいる者さえも、
この空気に言葉をつつしみ
あたりは多くの人が集まっているとは思えない静けさです。

少し、時を置き、静まり返った広場に朗々とした声が響きます。

「ありがたくも拝観いたします、勿体無くも我等がサジテ領ご領主
子息、シュリス・コズン様に
盛大なる祝いの声を許す。」

呪縛が溶けたかのように、ドツと。歓声が上がリ、どこからか
この季節に珍しいラサクの薄紅色の花びらが雨の様に降りました。
人々は、一目、美貌のシュリス卿を見ようと目をこらし、運良くし
っかりと見ることができたものは
誰かまわず、どうだこうだと言い合います。

広場に入りきれないほどの人々がシュリス様に釘付けですが
すこし、左

純白のベールをかぶり、幸せのリユリの花束を持つ花嫁に目を向け
れば

ほほえましくも、顔をほんのり赤らませてシュリス様に寄り添い歩
むギユムルの

初々しい姿に気付けたでしょう。

巨大な歯車

「奥方様に置かれましては、今後こちらで就寝していただくこととなります……」

装飾も美しい部屋は、夫婦の寝具として相応しい物も置いてありましたが、

この部屋はあくまでも、ギユムルの”控えの間”であると通されたのでした。

どうやら結婚で、お伺い無しでは夫とはいえ、会うことも儘ならぬ関係になってしまったようです。

下級とはいえ貴族の端くれだった実家では考えられないことでしたが大貴族では普通のことなのでしょうが。

婚約期間中に、結婚したらこの方と一緒にいるのだからと、いろいろ克服レベルを上げていたのですが見当違いの結果だったようです。

巨大な歯車

「おはようございます。奥方様、今朝のご気分はいかがでしょうか。」

挨拶は扉から八歩の距離で言うこと。

そこまでも決められているのではないかと、一ヶ月生活をしてまったく同じ動作をする侍女達の機械のような挨拶に感心していた。

ここは、一分、一秒を決められて、皆それぞれ歯車の様に、かみ合わされながら動く一つのからくりみたいだった。

定時になれば、同じ場所に人は違えど、必ず役割の者がいる。

イレギュラーな事はごくたまに起きるが、解決をすれば、また何事もなかった様に戻ってゆく。

巨大な屋敷は、多くの人々が働くとは思えぬほど、とても静かだった。

ギュムルはその中を、一人自由に行き

この、静かな歯車たちの動きを観察して、そう結論付けたのだった。

それぐらいしか、する事が無かったと言うことである。

ただ小虫のように、そのあたりを飛び回っていたのは、妻としての自分が必要とされることなく

夫となったシユリス様には一ヶ月で三回ほど夕食を共にしたぐらい。

夫婦とは名ばかり。ギュムルは限界がきていた。

小さな戦争と結果

右手に縫い終えたばかりの、ひざ掛けを持ち。ギュムルはこっそりと部屋を出ました。

別に咎められる事はありませんが、執事頭にはつたりと会ってしまつては作戦が台無しです。

これはギュムルの小さな戦いなのですから。

小さな戦争と結果

まずは、少し自分が役に立てたらと、ギュムルは思った。

厳かに飾り付けられた居間の居心地をよくしたらどうだろうか？
と思ったギュムルは執事頭に提案するつもりで向かった。

「奥様、当家には格式と言うものがございまして……」
話し始めて物の数分で、いつもの語尾をあいまいにした言い方で、
やんわり……はつきりと
相手にされず、むしろ馬鹿にされた感じで、部屋から戻された。

それから何度か、居心地のよい居間のすばらしさや、華美に飾り立てられた現在の居間の欠点を
若干、主観的にだが、執事頭に訴えた。

そのうち正規に訪れると、居留守を使われるようになってしまったため

ギュムルは一ヶ月間で把握した、執事頭の行動スケジュールに沿って出没するようにした。

それでも、断固として居間を改良（執事頭的には、改悪されると思っ
ているらしい）を拒む

彼に、ギュムルはついに押してだめなら、踏み込め
と行動を起こした

前から思っていたのだが、あの熊の手触りは絶対いいので
暖炉の前であればきつと素敵なラグマットになるだろう。

ギュムルは毛皮のタペストリーを壁から外し、暖炉の前の床に敷
いた。

翌日にはきつちり同じ場所に戻っていた。（しかも二度と外せない
ように釘まで打ち込まれて）

猫足の金色ソファは、すわり心地が致命的に悪く、手触りも金糸
の刺繍のせいでざらざらしている

そんなソファではごろ寝ができないので（はしたないので、たま
にしかないが）

ふかふかの毛布でカバーを作って掛けてみた。われながらいい出来だったので

同素材でクッションを作って、もっていくと

ソファーごと入れ替わって、さらにゴージャスな肘掛付になっていた。

時間が勝負だと、執事頭が通らない時刻を見計らって花瓶にバラの花束でなく、野花を活けた、が。部屋に帰ると、そのまま花瓶ごと置いてあった。

もうこうなったら、戦いだと

ギョムルは皆が寝静まった夜中にこっそり、起き上がり明かりも持たず、部屋から忍び出た。

新しく作った、採寸済みソファーカーバー（肘置きカバー付）を夕方執事頭が忙しい時間に

取り付けたのだが、その成果がどうなったのか確認するためだ。

急ピッチで仕上げたため、すわり心地も確認できなかったので一応、まだあれば座ってみようと、おそろいのひざ掛けも用意して準備万端である。

部屋から明かりが漏れ、暖炉にまだ火がくべてある。

撤去中に遭遇してしまったのか
耳を澄ましても、薪のはぜる音が聞こえるぐらいだ
恐る恐る、入ってみる

「あつ・・・」

どれほど振りだろう、シユリス様があるうことか
ギュムル手製のソファーカーバーの上で眠っていた

しばらく動悸が激しくて、動く事もできず目もそらせず、ギュムル
はそのまま佇んでいたが
さすがに、訓練をつんだ事もあるので、すぐに落ち着いてきた。

夫婦とはいえ、部屋も別々なので本当に久しぶりだ。
久しぶりに見る夫の目の下につつすら、隈のような影がある気がし
て、そっと近づいてみた。

彼はずっと執務室に籠りつきりで、
たまに夕食の席に現れても、小鳥の餌ほどしか食べない。
シユリス様がどんなに不摂生か分かってはいたが

「やっぱり疲れてらっしゃるのね・・・」

ギュムルはそっとひざ掛けを掛けて、静かに部屋の扉を閉めた

翌日、気になって居間に向かうと、キッチンとたたまれた、ひざ掛け
とカヴァーもそのままのソファアが
まだ、そこにあった。

どつちやら夢ではなかったらしい。

それから次の日もまた次の日も、ソファアールとひざ掛けは居間に居続ける事になる。

積み重ねられた時間の意味

昨日の事は、夢ではなかったか

ギユムルはゆつくりと、扉を開けた
そこには、カバーをかけられたソファーと、きちんと畳んだひざ掛けが確かに

朝日の中で確認できた。

昨日、ここにシュリス様が眠っていたのだ。

ポスンと、ソファーに座り込み、ひざ掛けを手繰り寄せる。

「すわり心地の確認をしにきただけだったのに」

ノックの音がし、返事を待たずして執事頭が入室してきた

「奥方様、朝食のお時間ですが・・・」

まだ座り心地に、いや、この場所が名残惜しいが、仕方が無いのでギユムルは立ち上がった。

「・・・少し、よろしいでしょうか。」

初めてかもしれない、執事頭から話しかけられたなんて

戸惑いつつも、振り返り返事をする、執事頭は部屋を見渡した

「あちらの、熊のタペストリーは坊ちゃんまの13歳記念の狩の時、しとめられた獲物でございます。」

この狩は近隣の家畜を襲う野犬を、駆除する目的で坊ちやまが提案されたのですが、野犬を追っていた猟犬に追い立てられて迷いでてしまった熊がいます。

村の付近で暴れて、仕方なく坊ちやまが仕留めたのです。

このような大物は滅多に仕留められませんので、参加者は皆、坊ちやまを褒め称え、記念に

タペストリーとして壁にかけましたが、坊ちやまは最初よしとしませんでした。」

執事頭は壁に掲げられた熊を見上げ、

「あれは、メスです。冬籠り前の時期に森の食料が無くて、降りてきた母熊だったのです。

前の年に、食料危機に備えて農地を拡大した土地のすぐそばに穴倉が見つかりましたし、

小熊が一頭、餓死していましたからまず、間違いは無いですよ。

農地拡大案を出されたのは坊ちやまでしたから、発見されたのも視察に見えた坊ちやまです。

その事があって、掲げる事を最初良しとしなかったのですが、教訓のようにあのままにしてあるのです。」

”手触りがいいから暖炉の前にぴったりだろう” そう思って自分は暖炉の前に置いた

その毛皮の意味は、決してそのような事を許さないのに。

「この屋敷には、いろいろなしきたり、伝統がございます。そこに過ごされた御先祖様の功績

由来があるのです。奥方様にはその事を思つて、行動していただきたいのです」

暗に、この屋敷の時間の重みを踏みにじるなと口で言われるより堪えた。

「・・・少し、お時間を頂きまして、申し訳ございません。朝食の用意は整つて降ります

どうぞ」

低く下げられた目線、傳く彼の後ろに気の遠くなるような時間がある。

その人は、

「ごめんなさい」

最初、執事頭は自分に向けられた言葉ではないと思った。

「いえ、出すぎたまねをいたしまして・・・旦那様は幸い、ご存知ない内でしたので」

「ちがうの！いえ・・・それもあるけど、あなたにも謝りたいの。」

「私意地になっていたの。何も知らないで、あちこち弄ってしまっ
て。」

もしかしたら、私はご先祖様の大事な思い出を踏みにじっていて、
それがわかる貴方に悲しい気持ち
をさせたんじゃない？本当にごめんなさい」

使用人に頭を下げるなど、貴族社会で最も恥ずべき行為であると思
っていた

(どうやら自分は貴族社会に長く居すぎたようだ)

素直に謝る、奥方をみて思った

自分が悪いと思ったことは誤る、という基本的なことに、恥ずべき
事はないはずなのに。

「・・・この話には続きがございます
それ以来、坊ちやまは何事も一つの側面から見るのでなくあらゆる
可能性をもって実行に移す様に
なられました。結果すべてが良い方へと向かいます。
この度のご結婚も、坊ちやまの・・・旦那様のご意思でございます。
奥方様を花嫁として望まれた
その、意図を私は実感いたしました」

「？」

どう言う意味か、どう捉えていいのか、執事の顔を伺う奥方を見て
少し

旦那様が望んだ事を執事頭は感じた。

「それでは、朝食のお席へ・・・」
朝食の時間をだいぶ過ぎてしまった、この屋敷は少しの時間のロス
も許されないのだから

「あの、朝食は後でいただきます。」
「いえ、奥方様。この時刻は朝食となっております・・・」
ギユムルは不思議に思った
「それって、どうしてもなの？」
なんだか、この時刻はこれをしると、規則がやはりあるみたいだ
この屋敷の仕来りも大事だが、ギユムルは今もっと大事な事がある
と気付いていた。

「用意してもらってるなら、申し訳ないわ。冷めてもいいからその
ままでと伝えて。」

それより私、貴方のお名前さえ伺ってなかったわ。お世話になるのに、ごめんなさい
いまさらだけど、教えてもらえる？」

名前を聞かれるなど、不思議なことだった。

彼女は、奥方と呼ばれ、ギュムルという名を呼ばれなくなったように彼も、この屋敷に奉公し、己の名を呼ばれなくなった
聞かれる事も、貴族社会においてまず無い。

「……ソダーズと、お呼びください。ギュムル様」

執事頭、ソダーズは目の前に居る奥方様が、栗毛色の髪が光に透けるとブロンズの様になる事

色は白いが少し、日焼けの所為か象牙色をしている事

そして、まっすぐ目を見て喋る方なのだと、奥方様ではなくギュムルとしての彼女の印象を持った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8886j/>

約

2010年11月5日11時17分発行